

## (4) カボチャ

### 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
べと病 ( <i>Pseudoperonospora</i> )	①敷きわらを十分施し、土壌表面から病原菌がはね上がるのを防ぐ。 ②肥料切れさせない。ただし、窒素過多にならないようにする。	①発病初期から農薬を散布する。 (例) クレソキシムメチル水和剤 (ストロビーフロアブル) シアゾファミド水和剤 (ランマンフロアブル) マンゼブ水和剤 (ジマンダイセン水和剤、ペンコセブ水和剤)
	【参考事項】 20～25℃前後で多湿な条件下で多発する。 降雨と肥料切れが重なると発病が多くなる。 感染は気孔から行われるので、農薬散布は気孔の多い葉裏にもかかるよう丁寧に行う。	
疫病 ( <i>Phytophthora</i> )	①排水を良くして、水たまりがでないようにする。 ②定植時に株元を高くする。 ③敷きわらは地面が見えない程度に十分施し、溝につるが落ちないようにする。 ④発病株を早期に発見し、適切に処分する。 ⑤果実の収穫は晴天時に行い、収穫果は風通しの良い場所に保管する。 ⑥収穫後、茎葉を適切に処分する。 ⑦連作を避ける。	①発病初期から農薬散布をする。 (例) シモキサニル・ベンチアバリカルブイソプロピル水和剤 (ベトファイター顆粒水和剤) アゾキシストロビン・TPN水和剤 (アミスターオブティフロアブル) ホセチル水和剤 (アリエッティ水和剤) マンゼブ水和剤 (ジマンダイセン水和剤、ペンコセブ水和剤)
	【参考事項】 生育適温は28～30℃で、多湿条件が重なると多発する。 低湿地で発病が多いので、まわりから浸冠水するようなほ場での栽培は避ける。 収穫時には外観上健全でも、出荷後に市場で発病することがある。 未熟果は発病しやすい。 病原菌は多犯性でトマト、キュウリ、ピーマン、トウガラシ、ナス、スイカなどでも病気を引き起こす。	
うどんこ病 ( <i>Sphaerotheca</i> )	①窒素肥料の過用を避ける。 ②老化した下位葉は伝染源となりやすいので、除去するとともに風通しをよくする。 ③収穫後、発病茎葉を適切に処分する。	①発病初期から農薬を散布する。 (例) シフルフェナミド・トリフルミゾール水和剤 (パンチョTF顆粒水和剤) ピリオフェノン水和剤 (プロパティフロアブル) フルチアニル・メパニピリム水和剤 (ショウチノスケフロアブル) ポリオキシシン水溶液 (ポリオキシシンAL水溶液) メパニピリム水和剤 (フルピカフロアブル) 薬剤耐性菌発生のおそれがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。
	【参考事項】 病原菌は各種ウリ類に共通のうどんこ病菌である。 老化した葉から発生する傾向がある。	
アブラムシ類	①畝面全体をシルバーフィルムで被覆する。 ②周辺雑草を除草する。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) ピリフルキナゾン水和剤 (コルト顆粒水和剤) フロニカミド水和剤 (ウララDF)
	【参考事項】 ワタアブラムシが主要種である。	
コナジラミ類	①周辺雑草を除草する。	①定植時に粒剤を植穴土壌混和する。 (例) イミダクロプリド粒剤 (アドマイヤー1粒剤) ジノテフラン粒剤 (スタークル粒剤、アルバリン粒剤) ②発生初期から農薬を散布する。 (例) ピリダベン水和剤 (サンマイトフロアブル) ピリフルキナゾン水和剤 (コルト顆粒水和剤)
	【参考事項】 タバココナジラミ (パイオタイプB) が寄生した株の葉は白化する。	

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
センチュウ類 (ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	<p>① 対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。  ・ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタラリアスペクタビリス、マリーゴールドなどが有効  ・ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールド、ルドベキアなどが有効</p> <p>② 太陽熱消毒を行う（土壤病害虫の防除法の項参照）。</p> <p>③ 有機物を施用する。</p>	<p>① 定植前に土壤くん蒸する。  (例)  クロルピクリン・D-Dくん蒸剤（ソイリーン）  D-D剤（D-D、DC油剤、テロン）</p> <p>② 定植前にバスターリアペネトランス水和剤（バスターリア水和剤）を施用する。  (ネコブセンチュウのみ)</p> <p>③ 定植前に粒剤を施用する。  (例)  ホスチアゼート粒剤（ネマトリンエース粒剤）（ネコブセンチュウのみ）</p>
<p><b>【参考事項】</b>  カボチャではネコブセンチュウによる被害が大きい。  対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。  有機物を施用すると、土壤中の生物相が豊かになり、センチュウの天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。</p>		